

# 東奥日報

2020年(令和2年)9月22日(火曜日) (12)



## 病棟の空気流れチエック

ハ  
P

### 八戸市民病院と八戸工大

八戸市立市民病院と八戸工業大学は21日までに、同病院の感染症病棟内で、陰圧装置や換気装置の作動状況や空気の流れを確認する実験を行った。新型コロナウイルスの院内感染防止対策が目的。病棟内でウイルスを含むエアロゾル(微粒子)に見立てた蒸気を発生させ、その流れを可視化することで、蒸気が滞留する場所などがないか調べた。

(千葉真由美)

◇ 感染症患者が入院する病室は、室内の気圧を下げる(陰圧化する)ことで菌やウイルスが室外に出るのを防ぐよう整備されている。実験は同大機械工学科の浅川拓克准教授が中心となり実施。専用の液体を熱して

八戸市民病院で行われた、病室前の廊下で発生させた蒸気の換気状況を調べる実験(八工大提供)

## 院内感染対策 蒸気で実験

蒸気を発生させる機材「フオクマジン」を使い、感染症病棟の病室内や廊下、浴室、ナースステーション前で、それぞれ蒸気の流れと換気状況を調べた。

浅川准教授によると、いずれの場合も適切に換気が行われ、設備が正常に作動していることが分かった。また同病棟内に設置している、コロナ感染疑いのある患者からPCR検査の検体を採取する時に医師が入るボックス「Boxer(ボクサー)」の安全性も確認した。

浅川准教授は実験を通じ「医療者は空気の上方にいた方が感染が防げる可能性がある」と分かったと振り返る。今明秀院長は「病室のドアを開けていても蒸気が室内で換気され、廊下に出ないことが分かった」とし「ただ蒸気がいったん床に落ちてから舞い上がり、天井の換気口に入った。床は感染対策上危険」と述べ、実験結果を今後の院内感染対策に反映させる方針を示した。